野風呂

ポン次郎は
もううれしくて
うれしくて仕方が
なかったので
ございます

今朝お母さんに
少しくらいなら遠く
まで遊びに行っても
よろしい……

そう言われたので
生まれて初めて
こんなに遠くまで
遊びに来たので
ございました

ぴょんぴょんぴょんぴょん

人間の里へ近づいてはいけませんよ……お母さんの言葉ももう頭の中にはなかったのでございましょう
ざー
ざー

ぜぇ
ぜぇ

もう帰ろかなァ
あー
あー
あー

なんだろう
なァ
これ……

うーんうん

ちゃぽ

ぷらー
ぷら

じっ

あっぷ
あっぷ

ふーっ

ぷか
ぷか

はぁはぁ

ジルジル

だれか
来た？
がさがさ

足音が
人間のだとわか
るとすぐ
お母さんの言葉
を思い出した
のでござい
ましたが……

でもポン次郎はお母さんに
「おもえも　もう
化ける練習をしてもいい
年頃になりました」そう言われて
おそわった通りやるのですが
まだどうしても　うまくは
できなかった
のでございます

でも今は そんなことは 言っては おられません
ごにょ
ごにょ

ぼ
ん

ぶく

ふうーん
いい湯じゃ

だぼん

ふーっ

んむ?

なんだ?
おや魚が
いるぞ!?

なんで
また
こんな所に
………

こら
まっ

ドロン

おんや？

ははあ
タヌキめ化けていたんだな……
ふっふっ

ようし今晩はタヌキ汁だ

わははは
がはっ

人間だ………

さあ大変です
ポン次郎はもう怖くてこわくて泪がポロポロこぼれるのでございました

おや

こいつは子供だな……

ふうむ

ほうら
ざぶぉ

ああ汚ねえなあそんなに泪をこぼしたら
ポロポロ
ポロ

湯が塩っ辛くなっちまう
ポタポタ

ぽい

じっじじ

ばた

ポン次郎の小さな
心臓は
ドックンドックンと
音をたてて
はずんで
おりました………

そのわけはあんなにおそろしい目にあったことやどんどん走ったこともあるのでございましょうが今はもう初めて化けられた喜びを
早く家へ帰ってお母さんに知らせたい……そう思う気持ちで　だんだんと胸がいっぱいになって来るのでございました
はあはあ